えてくる。クキクキ。コキコキとまるでレバーでも操作するように上下左右に折り曲げられれば、痺れは倍増して壮絶なまでの乳悦を伝えてくる。

さらに表面に生えたザラザラを活かすようにしごかれれば、殆どボディペイント同然の極薄スーツはその刺激を全く緩和することなく勃起しきった乳首に伝えてくる。まるで無数の歯に甘噛みされるような圧迫感と擦過感に心臓が止まりそうなほどの快感が押しよせてきた。

(だめっ……ここで負けたら、ゼロの肉奴隷にされる……!)

瑠璃はありったけの精神力と魔力を動員してナイフの柄をを握りしめ、更に土手っ腹奥深くにねじり込む。

「ぐっ!!! そうだ、そうこなくちゃいけないよ。簡単に屈服してしまうようじゃ面白みがないからね。……なあ、こんなに密着してるんだ、親愛の証にキスなんてどうだい?」

「何をふざけたことを――っ!?」

その言葉が終わるやいなや、ゼロは自らの『伸ばした』のだ。そのくちはまるで酸素マスク状にになっており、瑠璃の顔面に近づくとカポッと口と鼻をふさいでしまう。

「や、やめ、離れなさい……うっっっっ!!!??」

触手の管で繋がっているゼロの口から吐息が吐き出された。それはやたら甘い香りがし。一息吸うだけで胸の奥がかぁっと熱くなる。

(媚薬ガス――っ!! く、だめ、今は引きはがせない……!)

今ナイフから魔力を送るのを止めればもっと好き放題されるのは目に見えている。ガスの吸うのを承知の上で呼吸せざるを得なかった。

「こひゅーっっ!! こひゅーっっ!! う、うぅく……!」

吸い込む度に肺から血液に取り込まれて。体中が燃え上がるように火照っていく。汗そのものが催淫効果を持ったようで、肌が敏感になっていくのがわかった。

汗をたっぷり吸ったスーツが地肌に擦れる度にピリピリと甘い痺れが全身から押しよせてくる。

それはおへその下の機関、子宮に集約されて級きゅんと切なく疼いてしまうのだ。膣はすでにうねって愛液をはなちはじめ、ほころび始めた陰唇からこぼれだしてスーツに舟型のいやらしい染みを作り出している。

「もうこんなにぐっしょり濡れているじゃないか……いけない娘だ……戦闘中だというのかわかっているのかな?」

そういうとゼロは股間から触手を伸ばし、スーツにペットリ貼り付いて透けてしまっている女陰に縁に触れた。

「はぅぅっっっっっ!!!」

腰にビリビリッと電流が走る。快美な感電に思わず腰が砕けそうになった。そのまま布越しにラヴィアをなぞるように擦り立ててくる。

魔力防壁すら無効化する魔液を女陰に塗りたくられたのでは溜まった物では無かった。あっという間に股間が煮えたぎるような灼熱の熱さに包まれ、甘い淫熱に焼き焦がされそうになる。

「もう溜まらないんじゃないかい? ここに――おまんこにぶち込んでほしいんじゃないのかい?」

「ふざける……なっ……! 私はそんな淫らな女じゃ、ないっ

「あっひぃいいいいいいいいい!!!!　んほぉぉぉぉぉおっっっ!!!　ぐひ、ぎひぃぃぃぃぃっっっ!!」

　完全に準備完了とみたか、触手兵の股間部の装甲が開かれた。そこから伸びてくる触手もまた、メタリックで鉄のように見えるが自由にうねり狂う半淫半機の肉縄であった。太さはおおよそ愛理の太股ほど。先端部はなんとドリル状になっており、怪しげな粘液を吹き散らしながらぎゅるるっと回転していた。

　それがすでにぱっくり花開いて膣口まで透けさせているスーツの股間部にあてがわれ、布ごとごりゅっと強引に肉割れを押し開けて入り込んできた。

「んひぃいいいいいいいい!!!!」

　それだけで愛理は絶頂に押し込まれた。回転するドリルは肉襞を強烈に擦過し、肉粘膜を目茶苦茶にかき回す。あまりの太さに一ミリの隙も無く密着したメタル触手は襞の一枚一枚まで掘り返すような勢いで膣内で回った。

　一回転する度に無数の襞が抉り返され、その度に絶頂級の強烈な快感が送り込まれてくる。

（たえええええっっっ……耐えるの……!!　愛理……耐える……!!）

　歯を食いしばって必死に甲斐からの奔流に流されまいとする少女エージェントであったが、嵐の前の小舟のようにその抵抗ははかなかった。

　やがてドリル触手は子宮口をこじ開け、普段なら入り事が出来るはずもない子宮までズンと貫き通す。

「かはぁ……!!!」

　スーツ越しのお腹が触手型にボコォッと膨らんだ。

　重々しい衝撃と子宮内を回転体で擦り抉られるあり得ない刺激の前に、愛理は歯を食いしばってイクのを耐えようとするがどうしても絶頂に送り込まれてしまう。

　はかない抵抗を嘲笑うかのように、新たな責め手が現れた。電気パッドが膨らんだお腹。つまり子宮の上に貼り付けられたのである。そして、情け容赦なく電流を流し込んでくる。

「おっごぉぉおおおおおおんんんんん!!!」

　辺りがまばゆくなるほどの強烈なスパークを起こした電極パッドは愛理の子宮を焼き尽くした。肉体を改造するような電撃に子宮内壁は一瞬で性感帯に作り替えられ、ドリル触手の感触をより鋭敏に、そしてはっきりと感じ取ることが出来るようになった。

　その後も断続的に電撃を落とされながら子宮をほじくり返され、愛理は数え切れないほどの絶頂に送り込まれる。ポルチオ絶頂とはまたひと味違った未知の快感なすすべなど無い。

　しかしそれだけでは許さじとばかりに今度は一本のホース状の触手が伸びてきた。先端は尖った針のような形をしており、その脇にも二本丸っこいロッドが伸びている。

　その触手は極太にほじくり返されている肉穴の上で切なげに震えている豆、クリトリスに向かって伸びていった。そして針がブスリと完全勃起した肉豆に突き刺さった。

「ひおぅっ!!!　ひぎゃぅんんんんんっっっっっっっ!!!!」

　痛みはなかった。しかしこの触手の恐ろしさはそこにあるのではない。神経をクラッキングして直接快感経路に強制的な快感を流し込んできたのだ。それを敏感過ぎる快感神経の束であるクリトリスでやられたのだから溜まらなかった。

「ひがぁぁあああああああっっっ!!!　おっごおおおおおおお!!!!　んぎゃぅうううううっっっ!!!」

（おまめっ……はじけっ……!　おっぱいも、おまんこも、全部、痺れてきもちよひゅぎる……っ!）

　淫魔兵はプログラミングされた指令と本能にしたがってただひたすら愛理の全身を責めまくる。必死に歯を食いしばる愛理だったが敗戦は濃厚であった。

　百回目か、二百回目か、もう数えることなど出来ぬほど絶頂に送り込まれ

今度は体位を変え、スライムはウォーターベッドのように床に厚みを持って拡がった。その上にすっかり脱力した百合亜を乗せる。

「あっ……あああ……？」

するとズブズブとエナメルのゴシックブーツにつつまれた足がスライムの中に沈んでゆく。

結局空色のタイツとブーツに包まれたむっちりしたおみ足は大腿部まで飲み込まれてしまい、結果として百合亜はスライムの腹に跨がっているような格好になってしまった。

紫の手骸に包まれた両手もしっかり粘塊に取り込み、抵抗と能力を封じることも忘れない。このため腕は多少後ろに引っ張られる形になり、ロケット状に突きだした豊満すぎる爆乳は前方に突き出すような形になっている。

スライムが狙ったのはまずその爆乳だった。先ほどまでの媚毒スライム触手揉みですでに敏感になっているところに、スライムが渦巻きのような水流を作って両脇から挟み込むように揉みたててくる。

「ふあぁぁぁぁぁぁっっっっっ……!!!

お、おっぱい、痺れる……!!!」まず感じたのは乳芯を激しく震わせる震動であった。快感神経の束を直接水流に抉られているかのような気持ちいい疼きが生まれ、全身を駆け抜けていく。

さらに押し潰すかのように両脇からぎゅううっと乳肌を圧迫され、無数の柔らかい丸ノコの刃のような物に連続で抉られれば指でムニムニと高速で押し込まれているような刺激が走る。

「あっあふ……んく……んおぉぉ……あぅぅ……！」

（きもち……いい……いけない……集中……できない……）

実際の所手は別にあってもなくても能力は使えるのだが精神力の集中が出来ないとコントロールが出来ない。乳悦に悶えっぱなしの今では無理な相談だった。

さらに巣霊夢の水流に弾かれてなお押し返すような弾力を見せる生意気おっぱい緒をいじめるべくさらにスライムが動く。

空色のタイツ越しにボディペイントかというほどにくっきり透けている大きめの乳首と乳暈。そこに丁度電動マッサージャーのヘッド部分のような円筒系の粘塊が乳暈と乳首を押し潰すかのように強く押し当てられる。そして見た目通りに高速振動を始めたのである。

ヴッ……ヴヴヴヴンン!!!

「ひっっっっあああああああああ!!! ひぎっっっっっっいいいいいいっっっっっ!!!!」

完全に勃起して敏感過ぎるほど敏感になっていた乳首が高速振動で縦横無尽に震わせられまくる。乳首がもげてしまいそうな乱暴さだが、恐ろしいほどの悦感波動が乳首からわき起こる。乳暈まで丁寧に痺れ責めさせられるともう十度二十度と絶頂してしまって股間から愛液をプシプシと吹き出させてしまう。

その股間ももちろんスライム淫魔の魔の手の中にあった。百合亜が跨がっている座面に当たるところから大きなくびれを持った固く変形したスライムが伸びてくる。太さは少女の握り拳ほどはありそうだ。

それが一気に子宮まで貫いた。レオタード越しに腹がボコリと膨らむのが見える。太く、固い触手に膣襞と子宮内壁を抉られて百合亜はなすすべも無くまた一段高い絶頂に追い上げられていく。